

った。この間著者は青木謙太郎氏、鈴木摠兵衛氏等より絶大なる信用と殊遇を受けた事は終生忘れる事の出来ない鴻恩と今尚ほ深く肝銘してゐるのである。

加藤式伐出法

昔時の木材伐出擔當者は主家を思はず唯私腹を肥す事のみ汲々としてゐたので事業の多くは不結果に終りしものがあつたが著者は我流で以て之れを改良した、即ち時流に即した方法を獨創で斷行したのである。

明治三十九年から大正四年頃迄十ヶ年間は材摠を初め、長谷川、前島、吉見、吉村、吉長、長瀬(竹忠)、犬山の舟木屋、松永源右衛門、細江宇吉(沖村屋)、村瀬八重八、其他の山林業者が多數あつたが、その大部分の人々の行動は古來からの習慣とは云え恰も大名のその如く贅澤の限りを盡したもので實業として斯様なことが永續さるべきでないと思はれた、儲かる事業も何れは儲らぬ時代が来るに違いない、だがその儲かる事に安んじて斯の如き行爲をしたならば破滅である、商賣とは斯の様なものではない、今こそ濱木屋は從

來の營業政策が多少拙劣であつたがために力が無くなつてゐるが、其の内に世の人々を「アツ」と言はせねばならぬと考へたのである。

此の當時の入山振りを見るとまづ名古屋から人力車によつて出發した如くみせて遊廓で一日、二日豪遊をなし夫れより犬山に於て又遊ぶといつた有様で人力車も二人挽き三人挽きのお抱へ車夫で、宿に着けばその宿を買切り、土地の関係者、宿の人々は遠く迄出迎へさせさながら大名式である、給仕女の如きも遠くから之れを特に招いて侍べらせたもので夜は賭博、大散財を盛に行つて金錢を湯水の如く費消したのである、著者は明治四十年頃より獨特のやり方で之れ等先輩者の逆を行き、まづ人力車には乗らずに歩く、宿に着いても當時材木屋仲間の寄附でもつて作つた立派な部屋があつたが特に之れを避けてなるべく悪い部屋を使い、宿泊料の如きも安く掛合ひ、時には宿の手傳ひまでもして冗費の節約に努めた、勿論出掛ける時は腰辯である、一般の山師はその様に驕りに長じてゐたが古諺に言ふ「驕るものは久しからず」でその結果は今日よく現われてゐる。之れ等の人々の逆を行つた著者の態度と同じ行き方をした人々に、松永源右衛門氏、犬山の舟木屋、岡田長作氏の嶽父等の諸氏があつた、兎に角著者は極端なる質素の方法で刻苦精勵し一意専心主家

のために努力したのである、大正三年にはオリンピック號と云ふ自転車を買求め山の見廻り其他に大いに利用して山又山を馳け廻ったのである。ある時は未明に飛出して山を出發し五時頃岐阜に着したこともあり、又或る時は郡上の八幡から最も峻険なことで有名なほろこじ堀越峠の難所を自転車をかついで郡上郡祖師野村より美濃金山に出るが如き又金山よりまぜがわ馬瀬川沿道を遡上し山道を馬瀬村迄自転車で夫々事業地を見廻ったこともあり又川狩期みのかなやま節に木鼻、木尻を早朝見廻る必要の生じた時は美濃金山下流飛騨川沿岸の相當の悪路を最寒の候に朝食前に四里の道を突破した事もあって實見者に驚異の眼をみはらしたことであった、その刻苦勤勉と活動の激しかった事は到底想像の及ぶところではない。こうした極端な質素、精勵刻苦する有様が大正三年頃より弗々と世人の注目するところとなり、之れが鈴木惣兵衛氏の耳に入り頗る信任を厚くし、

「君から申し込まれたならば何時にても資本を出す故一生懸命努力されたい」

と、鞭撻、賞讃の言葉を賜った。この事は當時名古屋財閥一方の雄たる鈴木惣兵衛氏の口より出た事なので勢ひ銀行家の耳にも入り對外的信用を得、銀行に關する事はすべて材總に聞かれないといふ遣方をとつて一層社会的信用を厚く、強固にする事が出來た。其他細かいところに迄注意を拂ひ、山師の習慣としては多く山の仕込みは高山、金山、岐阜等で米及び其他即ち山で必要な物資を購入してゐたが、著者は大正五年に不要存置林の伐出に着手した時などは人用の物資を全部名古屋で購入して直送した。之は即ち山方乃至は岐阜で物資を購入すればその量で山仕事の状況が判るから之を防ぐ爲め名古屋で仕入れたのである、こうした些細な點迄配意して目立たぬ様質素に事を運び、内實は着々と大事業を遂行して行つたのである。

川狩の状況を眺めて

世人は一驚、注目す

斯の如く苦心に苦心を重ねて努力のすべてを捧げて事業に盡瘁し愈々川狩を始めた、茲に於て始めて世人の注目の的となり且つ驚きの目を以て迎へられた、伐木事業中は他の人の如く驕りに走らず頗る質素な方法で少しも人の目につかなかつたものが伐木が愈々川狩されるや誠に立派な材木が多量（約尺×壹萬五千本）續々と流下され、金山を初め下麻生かなやま
しもめそう

高山邊りの評判は素晴らしいものであった。

事業は順調に進み大正六年には木曾で拾萬圓の山を買ひ、郡上・飛驒方面でも買い出し、郡上川、飛驒川、木曾川の沿線一圓凡てに亘って伐出を初めて、時期もよかつた關係もあらうが大成績を納めた。

この頃に至つて山の風潮、思想が漸次實質に變つた様である。即ち實業である以上驕るものゝ永續するものでないといふ事が自分の趣旨であつて、その通り實行して之れが多少でも山の風潮に好影響を齎らしたことは欣快であつた、要は質素に地道に事業を遂行するものは最後の勝者となるといふ事を實證したわけで、常時驕り長じられた人々は現在に至つて山林事業に雄飛して居られず、どちらかと云へば衰退の道を辿られてゐる様である

壯年時代

濱木屋株式組織となる

大正四年から五年へかけて歐洲大戰の影響でインフレ景氣、大戰景氣は旺んなもので、

一大ブームを現出し、濱木屋も順風に帆をあげて事業益々隆盛に向ひ、尚ほ前述の濱木屋の相續者伊藤貞次郎氏は都合上別居退身せられ大正七年三河西尾町の舊家外山家より女婿を迎へられた、現在の濱木屋社長伊藤千里氏であつて、意志堅固温厚にて最も良き女婿であつた。この千里氏の許に諸員一致協力の結實は遂に大正九年に至つて資本金六十萬圓（三十萬圓拂込）の株式會社組織とする事が出來た。此處迄の苦難、努力は吾れ人共に筆紙に盡し難く、時勢の推運に依るところも亦大であつたらうが前述の如き幾多の泪の慘む様な辛苦の結果であつたことを想ひ切々と胸に迫るものがある。

「編者附記」濱木屋が合資組織となつて事業に更新の氣力が加はり、順調なる發展を遂げて株式會社となる迄の、即ち明治四十三年以來歐洲大戰休戦に至る間の世情一般、政治、經濟諸狀勢の主なるものを擧ぐれば

先づ名古屋市に於ては明治四十三年に第十回關西共進會が現鶴舞公園附近一帯に華々しく開催され、當時としては畫期的大博覽會の事とて内外の視聽を聚むる處となり、大名古屋市の發展は此の年より加速度的に進みたり、此の年は更らに名古屋で開府三百年記念祭が開かれ、共進會、記念祭と洵に素晴らしい大賑ひを見せた、明治四十四年には